

## シンガポール航空ショーに見る東アジア地域の軍備強化

漢和防務評論 20180507(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

今年2月にシンガポールで開催された「シンガポール航空ショー2018」を見た漢和の評論記事です。

米国はシンガポール航空ショーを重視し例年最新装備を展示し、アジア諸国に対する米軍のプレゼンスを示していると KDR は評価しています。

近年は南シナ海で中国の急激かつ一方的な軍拡が見られ、オーストラリア軍の軍備強化も注目しています。

日米間、米オーストラリア間の同盟を合わせればアジア版 NATO であり、準軍事同盟として中国に対応することができる、と述べています。

### KDR 編集部モスクワ

今年のシンガポール航空ショー（2018年2月）の目玉商品は、当然直接日本から飛来した米海兵隊の F-35 及び空軍の F-22 である。シンガポールに米軍の次世代戦闘機、攻撃機が全て集結したのは初めてである。シンガポール航空ショーは、他の地域の航空ショーとは異なる。米軍は、毎年この航空ショーを軍事力展示の場所としている。2年前に、すでに2機の F-22 を展示し、今年は最新の F-35B を展示した。日本やオーストラリアはすでに F-35A の領収を開始しており、中国の周辺ではすでに次世代戦闘機の更新と集中配備が始まっている。航空ショーの間に、中国空軍は”すでに J-20 を戦闘機部隊に配備した”と宣伝したが、これは F-35 がアジアに配備されたこと、特にシンガポール航空ショーに展示されたことに対する対抗処置であると KDR は見ている。

注意すべきことは、当然オーストラリア空軍の対応である。今回航空ショーに、ボーイング 737 型早期警戒機と P-8 対潜哨戒機を展示した。オーストラリアは、すでにこの地域で日本に次ぐ海空軍国になった。特に南シナ海においては、オーストラリアの軍事力の存在が中国にとって大きな脅威となっている。日、米、澳（オーストラリア）3国の準軍事同盟関係はまさに強化中であり、正式な条約ではないが、”アジア版の NATO”を形成している。

まずオーストラリアの海空戦力を見る。今回展示されたボーイング 737 型早期警戒機はソウル航空ショーにも何度も展示された。一旦需要があれば、同機の航続距離は 6482KM もあるので、南シナ海、東シナ海をパトロールし、日本に着陸することも可能である。或いは単独で南シナ海全体をパトロールすることも可能である。ボーイング 737 は海空目標を同時に捜索することが可能であり、戦闘機の大きさであれば目標探知距離は 300 乃至 600km と見られる。また同時に 180 個の目標追跡と 24 個の空中目標をスキャンすることができる。

オーストラリア空軍は 6 機のボーイング 737 早期警戒機を保有しており全天候下で南シナ海全体を監視することが可能である。オーストラリア軍の消息筋は

国際会議の場で率直に認めた：中国は、すでにオーストラリアにとって最大の”注意すべき国”であり、オーストラリアの軍備強化の主目的は中国の南シナ海における軍拡に対処するためである、と。

オーストラリア空軍は 98 機の F-35A をオーダーした。現在最初のグループはすでに到着し試験飛行を行っている。オーストラリアはこの地区で F-35A を最も多く保有する国家である。また現在 24 機の F-18E/F を保有しており、F-18E/F の電子技術レベル、AESA レーダーは、中国の如何なる戦闘機よりも優れている。また同空軍は、12 機の電子戦専用の EA-18 を有している。同機は、中国の南シナ海にある人工島の各種レーダーを攻撃する能力がある。全体的に見て、オーストラリア空軍の実力は日本に劣らない。

シンガポール航空ショーで、オーストラリア空軍は P-8 型対潜哨戒機を展示した。これは現在世界で最も先進的な対潜哨戒機であり、日本ですら未装備である。オーストラリア空軍は 11 機輸入済みで 7 機オーダーしている。このことからオーストラリアは、南シナ海での中国潜水艦の活動を相当警戒していることが分かる。有事には、オーストラリアの対潜戦力が中国の 093B、094A 核動力潜水艦を追跡し、日米に通報する可能性が極めて高い。米国とオーストラリア、日本と米国は軍事同盟を結んでおり、LINK-16 データリンクは共通である。またオーストラリアは 15 機の AP-3C 対潜哨戒機が就役している。P-8 の航続距離は 8300KM に達し、東シナ海、南シナ海を完全にカバーすることができる。戦時には、必要であれば日本に着陸することができる。

P-8 は、最新式のソノブイ、MAD を装備し、対潜ミサイルを搭載する能力がある。

日本とオーストラリアは、”部隊訪問”の協議に署名しようとしている。このことは両国軍隊が、軍事演習、訓練、配備等の方面で密接に協力することを意味する。これは同盟的性質のものである。

KDR は：一旦上述の協議に署名すると、すでに署名した”日澳軍用補給品相互支援協議”を再確認し、日澳の各種空軍機が相手の飛行場を利用できるようになり、双方の巡航範囲が拡大する。もしインドが日、米、澳の軍事協議に加われば、米国の”インド太平洋戦略”が軍事的に具体化する。

今回シンガポール航空ショーに展示された米海兵隊の F-35B は、最初に配備された作戦中隊である第 121 戦闘中隊である。現時点で 16 機の F-35B がすでに配備を完了した。今回日本に駐屯する米空軍の F-35A はこの航空ショーに参加しなかったが、米軍の最初の F-35A 中隊である第 34 中隊はすでに沖縄に配備を完了している。このことから、米空軍の最先進型戦闘機の主たる任務は、中国に対処することであることがわかる。

2016 年 1 月から、米空軍第 525 戦闘機中隊の F-22 戦闘機 12 機は、横田基地に配備された。今回シンガポールに出現した F-22 は、ここから離陸して参加したはずである。これ以前、F-22 は輪番方式で何度も沖縄に配備されている。F-22 は J-20 に対処するためか？

F-22 は、現在世界最高レベルのアビオニクス技術と飛行制御技術を取り入れており、真の第 4 世代戦闘機である。現在真の第 4 世代戦闘機と言えるのは F-22 とロシアの SU-57 だけである。

このように見ると、米軍装備の F-35A/B に日本とオーストラリアの F-35A を加えれば、数も質も中国の J-20 をはるかに凌駕する。米国ペンタゴンは、戦略評価報告において、中露を主要な仮想敵としているが、実際に配備しているのは対中国である。

中国は、今回のシンガポール航空ショーを重視し、初めて YL-1、2 型攻撃無人機の全寸模型を展示した。この無人機はすでに多くのアラブ国家に輸出されている。

KDR は、中国が潜在的ユーザーとしてこの種の無人機を輸出しようとしている国家は、インドネシア、マレーシア、タイ国、ミャンマーであると思う。これらのすべての国家は、中国製の軍事装備を保有している。マレーシアのパトロール艦は中国が落札した。このほか、QW-1 型地对空ミサイルは、パキスタン製を輸入し、また陸軍は、中国から直接 FY-6 型肩打ち式地对空ミサイルを輸入した。インドネシアは、2 種類の中国製肩打ち式地对空ミサイル、C-705、C-802 型艦対艦ミサイルを装備している。タイ国は、中国製潜水艦、VT-4 型主力戦車、装輪装甲車を獲得した。ミャンマーは KS-1A 地对空ミサイル等を獲得した。したがって中国の軍事装備品は、急速にこの地域に浸透しつつある。このことは、米軍のこの地区に対する軍事的影響力を減ずるのに役立っている。

以上